

書評

佐々木啓一著

『椎名麟三の研究』上・下

垣田時也

『椎名麟三の研究』上・下二冊を読んだ。これは著者佐々木啓一氏の椎名麟三についての正確に言えば四冊目の著書である。最初は昭和四十三年五月に桜楓社から出版された『椎名麟三の文学』であり、次いで昭和四十九年四月、冬樹社から初版が、また昭和五十四年三月に増補版が出された『椎名麟三研究』であり、昭和五十五年二月に上巻が、同年三月に下巻が桜楓社から刊行された本書までには、実に十有余年の歳月を費している。それだけではない、処女出版の『椎名麟三の文学』の「序にかえて」の中で、「このようなかたちで世に出るまでには、かなりの時日を要し」とのべ、著者が椎名麟三の作品論をはじめ展開したのは昭和三十八年六月の『美しい女』論である」と記されている。こうなると、著者の椎名麟三への傾倒は約二十年にもほるわけである。その間、椎名麟三ただひとりにかけての全力的な執着と、その執拗な資料の収集・捜査と、さらにその上に立っての緻密きわまりない人間と文学の追跡は、周知のとおり、それこそ眼を見張るような数々の新見の発表につながったのである。当然のことながら、

この息のながい研究の成果は、著者をして、今日、椎名麟三研究の第一人者たらしめたが、それは、もはや学界既定の事実といっても、決して過言ではないであろう。

したがって、こうした歴大な資料を背景とした著者の永年の研究の成果を、椎名麟三研究については、まず門外漢といつてもいい私に、書評など、不可能なことと十分に承知している。然も、あえて、これを引き受けたのは、外でもない、私も、著者と同じように、昭和二十二年の敗戦の混沌と廃墟のなかで、まるでその混沌と廃墟そのものの象徴のように、突如として出現した椎名麟三の文学——つまり「深夜の酒宴」や「重き流れの中に」の重量感に圧倒されたひとりだからである。今、重量感といったが、それは椎名麟三が、その死まで、よろめくように抱きかかえて離さなかつた実存の重みといった方がより適切であろうか。椎名麟三は、それから、たてつづけに「深尾正治の手記」「永遠なる序章」「赤い孤独者」「邂逅」「自由の彼方へ」等の名作を発表し、文壇に不動の地位を固めていったが、戦後の新人といわれた作家達のなかで、この椎名麟三ほど作品の内容も当然ながら、その表題のつけかたのきわだつて巧みなひと、また少なかつたと思うのである。したがって、私などは、その魅力的な題名と、それにふさわしく、実存主義とニヒリズム、神とマルキシズムの鋭しい対決、不可思議な融合という当時の社会状況を鮮烈にカットした大胆な、然もきわめて高い観念的な作品の構造に、見事に酔いしれたのである。過日、著者から書評の依頼を受けた時、以外にあつ

ざりと、その任でないにもかかわらず引き受けたのは、当時の椎名麟三の文学から受けた傷痕のゆえであろうかと、今になって後悔の念しきりなのである。

その上、私は、著者とほぼ同世代であるという懐かしさで、著者の椎名文学への打ちこみの一途さに、身勝手にも私の椎名体験を著者に推しあてて、著者も、おそらく私よりも深く適確に、椎名麟三のあの実存の重みをみてしまったひとりなのだ、だからこそ、約二十年の歳月を、ただ一筋に椎名麟三の人間と文学を追い求めたのではなかったかと、椎名麟三によせる著者の愛情と共感以上に、椎名麟三に取り憑かれた著者の苦悩と孤独に、感傷めいた思いを馳せてもいたのである。

だが、それも、著者の『椎名麟三の研究』上・下を読むにいたって、私の思い描いていた、ごくありふれた椎名麟三像の一角が、音をたてて崩れ落ちるのを、どうすることも出来なかった。それは、この著者に収録されている論考の大部分が、戦時下の苛酷な状況下で、いかに文学的自立と、またいかに個としてのナショナルリズムを権力的、支配者的ナショナルリズムと支配される大衆的ナショナルリズムから主体的に、かち取るかという、複雑に入り組んだ椎名麟三の文学と思想のスタディに、つまり文学と文学以前の微妙なかかわりに焦点がすえられており、したがってその視座の鮮烈さはもとよりのこと、そこで縦横に駆使されている私などには全く未見の資料に、息をのむ思いがしたからである。これは、椎名麟三研究の資料のほとんどを押さえている著者の、まさに独

占場といってもよからう。

ところで、この『椎名麟三の研究』の構成は、上巻が七篇、下巻が五篇と年譜、主要研究文献目録、初出書誌一覧、大坪家の略系図、大坪家周辺の旧宅（江東橋）付近の見取図がそえられており、上・下二巻を通して、著者は「椎名文学の思想的意義に研究主題をおいた」論考のみを集め、所収の十二篇のうち、六篇は「日本近代文学」や「国文学・解釈と鑑賞」等に発表したものに部分的改稿を行なったもので、あとの六篇は本書のために書き下ろしの新稿であるのとべている。そして椎名文学の思想的意義も、上巻は主として「マルクス主義者、実存主義者、キリスト者という面からの考究とは別に、戦時下の実生活に根差したモティーフに重点をおいて」の論の展開であり、下巻は主として椎名麟三が十五歳で「家を捨てたこと」の問題で、これは結果的に著者は「家父長権の放棄を意味」といい、したがって「椎名にとつての家父長権の問題を彼の父との関連で捉えること」で論を展開したというのである。

もっとも、こういう著者の説明をまつまでもなく、上巻は「椎名麟三・その文学と思想序説」や「椎名に於ける戦時下の思念」そして「椎名麟三・その文学と思想」以外の四篇の論考、つまり「椎名麟三の転向体験」、「椎名文学に於ける成熟と受難」、「椎名麟三」 「椎名文学に於ける死の再生の意味」も、それぞれのテーマに取り組みながらも、そのいずれもが、実は「戦時下の実生活に根差したモティーフ」を根底に置いての論考で、したがって上

卷は「戦時下に於ける文学的自立とナショナルリズム的傾向に就いて」という副題をそえた「椎名麟三・その文学と思想序説」につきるといっても過言ではあるまい。そしてそれを裏づけるようにこの論文は長篇で、然も巻頭にすえられており、豊富な資料を存分に駆使して、多角的に、綿密な思弁で、くりかえし、くりかえし対象に迫ってゆく、その論の展開は、椎名麟三の戦時中の苦悩にみちた生ざまをドラマチックにすら象嵌しており、著者の意気込みと情熱に頭がさがる思いがするのである。

さてこの論文は、すでにのべてきたところからも自明のことであるが、椎名麟三が昭和八年四月の末頃、大阪刑務所を獄中での思想転向による出所以来、特高警察の監視下における忍渋の生活のうち、やっと掴んだ東京丸の内の新瀉鉄工所本社正社員を、経済的裏付けのないまま退職する問題からはじまるのである。著者は椎名麟三の退職の理由を、第一に職業と文学の二元的生活に疲れ果て「会社の仕事は誰だってやれるのだ、だが作家としてのこの自分の仕事は自分だけにしかやれないのだ」と考えたこと、第二に会社が軍需会社の性格を明確にして、椎名麟三がその資料発注の業務に日夜忙殺され、然も会社の蒲田工場が戦争生産をはじめたことに一種の「反戦思想による反抗ではなくて、生理的嫌悪」を感じたことに置き、「椎名が、軍需産業の会社を辞めたことで、思想転向による裏切者としての罪の意識から一応解放されること」が出来たのは事実だろう。二元的生活が自他への裏切りである以上、文学へ専心する一元への道は、苛酷な道であるが、生として

の権力への意志が、力の関係として直接に対決するところから来る緊張とその克服という過程を内在している道である。そうした主体のしたたかな認識と意欲が、一元の道を選ばせたのである。」とのべている。そしてこうした職業と文学の二元的生活から文学へと椎名麟三をを飛躍させるエネルギーとして、著者は、椎名麟三が会社退職の理由としてあげている「生理的嫌悪」を「少くとも、獄中転向の時期から潜在的に抱きつつあった怨恨感情のようなものであろう。」とのべて「怨恨感情」をあげ、この「怨恨感情」を鋭利なメスとして椎名麟三の生理を解剖してみせるのである。

たしかに著者の截断は鮮かで、論証の確実な展開をみると、同感と共感を惜しまないが、然し読後、これだけの資料の多彩さから考えて、著者のモチベーションに、少なくとも素直に肯定できない何かが残る。椎名麟三はその不幸な生い立ちと、悲惨をきわめた少年時代から青年時代への人間形成の大切な時期に、その生活からくる必然として、椎名麟三が作家として自立してゆく過程できっぱりと拒否した、あの志賀直哉にきわまる自然主義的リアリズムの延長線にある外側の風俗に、むしろ救感に適應する習性を育てていたとしても不思議はあるまい。だからこそ、戦争中は素直に国民としての義務を遂行し、当時の多くの知識人と同じくドイツのナチス文学への傾倒ともなったとみることも出来るのではないか。私は戦争中の椎名麟三の心情の一面には日本浪漫派のそれにかやうものがあつたと思うのである。然しまた一面、椎

名麟三の人間存在の内側は、やはりその生活からくる必然として絶望的に醒めきっていた筈である。だから椎名は自己存在の外側と内側のどうしようもないこの深い断層を、どう埋めるかに迷いぬき、苦しみぬき、それが結果としては著者が引用している資料として姿をあらわしているのです、その多彩な色どりはしたがって当然のことと思われるのである。もっとも、この椎名にとつての内側と外側との対立、矛盾の問題は、著者の説のとおり、主体的な個のナンヨナリズムの確立と文学的自立をうながすことによつて解決をみたのかもしれないが、それはどこまでも一応であつて、椎名麟三は、これを受洗にまで持ちこし、自らの神の発見にかけてみたものの、その不可能を見ぬいていたのでなからうか。私には「懲役人の告白」という小説は、このどうしようもない椎名麟三の絶望の告白と受けとめているのである。然しこれは椎名麟三研究については全くの素人の感想で、著者からの適切な教示をまらしたい。

次に下巻であるが、これは前述したように椎名麟三の家父長権をめぐる問題にスポットをあてたもので、著者のテーマ設定のユ

ニークさに驚いたのである。私などは、はやくから家の離散のゆえに辛苦をなめつくした椎名麟三に「家」をめぐる意識が根強いとは、思つてもみなかったのである。それどころか、著者が「椎名文学に於ける家父長権奪取の問題」で取りあげている小説「島長の家」を、一種の活劇的ロマンとして受けとめ、私のいう椎名麟三の外側の風俗に敏感に適応する習性の延長線上の作品とみていたのである。だが「習作期の椎名文学の世界」や「椎名文学に於ける家父長権宣言の問題」という論考に接するにつれて、形而上学的に大きく取りあげられる椎名の文学に、形而下の「家」が深くかかわっていたとなると、椎名文学に新しい角度からの読みなおしが迫られることになる。そしてそういう一角を斬り崩した著者の炯眼に敬意を表したいと思う。然し著者のこの視点には、当然に賛否の渦が起つている筈である。紙数もつきたので私も他日、これについての所感を書きとめたいと、ひそかに願っている。書評を求められて雑感に終つてしまつて残念だが、これも門外漢の妄言とおゆるしをこいたい。ただ著者の今後の御研鑽を祈るのみ。

(かきた・ときや 甲南女子大学教授)